No.13

HAPPY NEWS

ハッピーは、毎日、みつかる。

新聞には、政治・経済や事件・事故のニュースだけでなく、地域のほっとする話題などもたくさん載っています。新聞協会は4月6日の「新聞をヨム日」にあわせ、2016年度のそうした新聞記事とコメントを集めた「HAPPY NEWS 2016」を発表します。今回は日本全国から、前回を上回る3860件の記事とコメントが寄せられました。多数のご応募、ありがとうございました。

16年4月に発生した熊本地震は、痛ましい災害でした。しかし、現地の人々による力強い復興の様子を伝える記事には、大変多くの応募がありました。また、夏のリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックでは、日本人選手の活躍に元気付けられた――といった声も多数寄せられています。

全国の新聞・通信社とゲスト審査員による審査の結果、HAPPY NEWS大賞には、瀬戸内海の小さな島にある小学校の給食の様子を取り上げた記事へのコメントが選ばれました(2ページ)。

また、記事の中に登場し、読者に笑顔を届けた人物を表彰するHAPPY NEWS PERSONには、鹿児島県で子どもたちにラジオ体操を〝指南〟する謎のヒーロー「西出水爆笑戦隊」が選ばれました(5ページ)。同じく特別賞は、発見したIIIー3番元素を「ニホニウム」と命名した理化学研究所の超重元素研究グループに贈られます。

各ページに載っている記事とコメントは、温かさと新たな気付きに満ちたものばかりです。あなたも新しい新聞の魅力を発見してみませんか。

HAPPY NEWSキャンペーンは、新聞を読み、幸せな気持ちになったり気付きを与えてくれたりした記事と、その理由を募集するコンテストです。今回で13回目を迎えました。HAPPY NEWS No.13は、その受賞作品を収録した作品集です。これまでの受賞作品やキャンペーンの詳細は、新聞PRウェブサイト「よんどく!」をご覧ください。

よんどく! http://www.yondoku.com

CONTENTS

HAPPY NEWS 大賞	2
HAPPY NEWS 賞 2016	3
HAPPY NEWS 2017 募集要項	8
HAPPY NEWS 家族賞	10
HAPPY NEWS 大学生大賞	12
ゲスト審査員賞 (小山薫堂賞、miwa賞、森本千絵賞、山本昌賞)	14
第7回いっしょに読もう!新聞コンクール HAPPY NEWS 賞	16

HAPPY NEWS PERSON 特別賞

理化学研究所提供

理化学研究所 超重元素研究グループ

理化学研究所の研究グループは、2004年に世界で初めて原子番号113の新元素の合成に成功。16年11月、この113番元素の元素名が「nihonium(ニホニウム)」、元素記号が「Nh」と正式決定しました。新元素の命名というアジア初の快挙を伝える記事に、全国から「胸が躍った」「夢をありがとう」などのコメントが寄せられました。

受賞コメント(代表:森田浩介グループディレクター=写真前列中央)

ニホニウムの発見に対して読者の方々から温かいメッセージとともに、「HAPPY NEWS PERSON特別賞」をいただきましたこと、研究グループ一同、大変うれしく思っております。本受賞はさらなる新元素発見という次のステップへの励ましと受け止めているとともに、皆様のご支援に心より感謝いたします。

HAPPY NEWS大賞

HAPPY NEWS賞 2016（全11件）

一関・佐藤さん、列車で会った憧れの女性探して47年

「瀬峰の女（ひと）」よ 再会もうすぐ

読者投稿欄からつながる 「本当に夢のよう」

栗原

女性と出会った日の乗車券を感慨深げに眺める佐藤さん

一関市藤沢町の佐藤俊朗さん(74)が、47年前に夜行列車で出会ったきりだった憧れの女性の消息を突き止め、女性の古里の栗原市瀬峰で今月下旬に再会する。河北新報の読者投稿欄「声の交差点」で佐藤さんの恋心を知人が紹介したところ、女性の兄から「それは妹かも」との連絡があり、両者をつないだ。2人は「会うのが楽しみ」と再会を心待ちにしている。

佐藤さんは1969年12月29日夜、正月休みを利用して出稼ぎ先から一関市の実家に帰省しようと、上野発の夜行列車に乗り込んだ。隣に座ってきたのが、「かぐや姫みたいな人」（佐藤さん）だった。

行き先を尋ねると、女性は「宮城の瀬峰です。川崎市の会社を辞めて古里に帰るんです」と静かな口調で答えた。その後、会話は途絶えたが、眠りかけた佐藤さんの膝の上にそっとコートを掛けてくれた優しさや、佐藤さんの肩にもたれかかって眠る横顔を、ずっと忘れられずにいた。

胸の高鳴りを抑えられなかった佐藤さんは、その日の切符をこれまで大事に保管。おとといには、当時の淡い恋心を「瀬峰の女よ」と題して詞にしたためた。後に友人が作った曲に乗せてCDも制作。手掛かりを求め、市瀬峰総合支所などを訪ね歩いた。

そんな佐藤さんの思いを耳にしたのが、瀬峰下田行政地区長の後藤哲弘さん(68)。「新聞に載れば反応があるかも」と、「『瀬峰の女』よ 名乗り出て」との題で、恋物語を声の交差点に投稿した。掲載翌日の2月2日、女性の兄から連絡があり、電話でのやりとりを経て本人と判明した。

女性は現在69歳で、甲府市在住。同窓会出席のため帰郷する今月下旬、再会できそうだという。女性は「どんな話をしたらいいか分かりませんが、せっかくの機会なのでお会いしたい」と語った。

佐藤さんは「本当に夢のよう。協力してくれた方々と新聞に心から感謝しています。当日は緊張するかもしれないが、当時を思い出しながらいろんな話をしたい」と笑みを浮かべた。

47年ぶり憧れの人 面影はあの日のまま

「瀬峰の女（ひと）」と再会

一関の佐藤さん「感激。幸運です」

戸田さん（左）と談笑する佐藤さん

一関市藤沢町の佐藤俊朗さん(74)が47年前に夜行列車で出会ったきりだった憧れの女性の消息を突き止め、女性の古里の栗原市瀬峰で30日、念願の再会を果たした。2人は握手で久々の対面を喜び、当時の思い出を笑顔で語り合った。

女性は甲府市在住の戸田アサ子さん(69)。1969年12月29日夜、帰郷のため上野発の夜行列車に乗った。隣に座った佐藤さんは優しげな雰囲気を忘れられず、CD「瀬峰の女よ」を昨年制作。以後、栗原市の支所に行方を尋ねるなどして手掛かりを捜していた。

その話を知った瀬峰下田行政区長の後藤哲弘さん(68)が2月、河北新報の読者投稿欄「声の交差点」でいきさつを紹介すると、記事を読んだ戸田さんの兄が「妹だ」と直感。電話でのやりとりで本人と判明し、戸田さんの帰省に合わせて再会することになった。

JR瀬峰駅で対面した2人は握手を交わし、待合室のベンチで歓談。佐藤さんは「お会いできて感激です」と興奮気味に話し、「目元、口元に面影がある」とうれしそうに話した。

その上で「今は私も大好きな家族に恵まれている上、美しい思い出を振り返らせてもらった。幸運です」としみじみと語った。

戸田さんは47年前の帰郷は親に結婚の報告をするためだったとのエピソードを披露。「大好きな夫のことで頭がいっぱいで、実は列車内のことを覚えていない」と打ち明け、「このような機会に恵まれて良かった」とほほ笑んだ。

後藤さんは「電話やメールで簡単につながれる現代では起こりえないドラマだ。貴重な場面に立ち会えて光栄」と語った。

髙橋 千賀子さん

71歳 宮城県

「忘却とは忘れ去ることなり　忘れ得ずして忘却を誓う心の悲しさよ」。かつてのNHKラジオドラマ「君の名は」冒頭の名セリフです。この記事はまさに平成の「君の名は」。

47年前に上野発の夜行列車で出会った憧れの女性を探し続けた一人の男性。その男性の切ない思いがかなえられた、奇跡ともいえる再会の物語。思わず笑顔がこぼれた瞬間でした。

最初、読者投稿欄で記事を目にして、「見つかるといいね」から「会えるといいね」、そしてついに再会。読者の一人としてずっと陰ながら応援して来た私にとって、これこそHAPPY NEWSにふさわしい記事と確信しました。

この記事の背景は、集団就職全盛期、「金の卵」と呼ばれた私たち世代が、東北地方から東京へと、故郷を後にした若者たちの人生舞台そのものです。

新聞の力、ペンの力、皆の思いがつながって夢がかなった喜びが紙面から伝わってきました。

河北新報　2016年5月20日付朝刊、5月31日付朝刊を読んで

頑張れば「主役」に

ファイトマネー施設に寄付

キックボクサー 筑西の田口さん 不屈の精神で恩返し

施設の運動会でミット打ちを披露する田口尚さん=筑西市茂田の茨城育成園

筑西市の児童養護施設出身で同市の田口尚さん(25)が会社勤めの傍ら、プロとしてキックボクシングのリングに立ち、「施設のヒーロー」として入所する子どもたちに希望を与えている。「恩返しに」と試合のたび、ファイトマネーの一部は同施設に寄付してきた。同施設時代は引っ込み思案だったという田口さんは「頑張れば自分のやりたいことができると伝えたい」と力を込める。キックボクシングは今月引退し、11月からは新天地で、新たな仕事に取り組む。

■転機はジム

同市のキックボクシングジム「ドージョー☆シャカリキ」に所属する田口さんは、同市の光陽精機つくば工場に勤めながら、試合に臨んできた。

田口さんは家庭の事情から、同市茂田の児童養護施設「茨城育成園」で、3歳から18歳まで過ごした。

同施設では感情を表に出さず、無口な少年だった。学校では家族に関する教師の何げない問い掛けに傷ついたこともあった。施設にいることを伏せ、時にうそを重ねざるを得なかった。

県立下館工高に進学し、同好会で週に数回、ボクシングの指導を受けた。就職してからはボクシングと離れたが、「やることがない」と感じていた20歳を過ぎたころ、たまたま立ち寄った同ジムでキックボクシングに夢中になった。

「プロになり、ファイトマネーで施設に恩返ししよう」

昨年7月にプロデビューし、ファイトマネーの一部は毎回、同施設に寄付した。

格闘技イベント「RISE ZERO」のキックボクシング・フェザー級新人王決定戦では、決勝まで勝ち上がった。決勝は今月9日、東京で行われ、惜しくも判定で敗れ準優勝だったが、勤め先や同施設から、同僚や職員計100人近くが応援に駆け付けてくれた。

■来月からは新天地

キックボクサーとしての通算戦績は4勝2敗(1KO)。仕事をこなしながらの練習や減量はつらかった。だが、この間、勝つ喜びと負ける悔しさを、応援してくれる人たちと共有できたことがうれしかった。

「頑張れば、リングの上では主役になれる」と気付き、施設時代に感じていた恥ずかしさや後ろめたさは吹き飛んだ。

大勢の観客の前で試合する姿に、同施設職員の松崎浩一さん(42)は「昔の尚君からは想像が付かない」と驚く。「尚君の姿を見て、施設の子どもたちも『やればできるんだ』と感じてほしい」

最後の試合から6日後、秋晴れの下で開かれた同施設の運動会。開会式に集まった子どもたちを前に、田口さんは鋭いパンチやキックを披露し、プロ生活に幕を下ろした。今回のファイトマネーの一部も同施設を運営する慶育会の中山公実理事長に手渡した。

田口さんは11月、東京の会社に転職することが決まっており、電気工事関連の新たな仕事に就く。同施設がある筑西市から埼玉県内に引っ越す。これまでの練習や試合で培った忍耐強さと、流した汗が自分の支えになると信じている。

「茨城育成園で育ったことに感謝している。誇りに思う」。今は施設出身と堂々と言える。（黒崎哲夫）

仙波 純子さん

52歳 茨城県

この児童養護施設のある筑西市の出身である私は、「茨城育成園」の存在は昔から知っていた。

そこで育った青年がプロのキックボクサーとなり、ファイトマネーの一部をそこに寄付してきたという。その彼は、今までどれほどの苦労と努力をしてきたのか、平凡に育った私には想像もつかない。

ともすれば「施設出身」を隠しがちになってしまうのも無理はないであろう子どもたちも、田口さんのような先輩がいることで、どれだけ勇気と将来への希望をもらえたことだろう。

道を外れず、心身共に強い青年に成長した田口さん自身の努力はもちろん、彼を見守り温かく優しく、時には厳しく、養育されてきた茨城育成園の職員の方々にも敬意を表し、拍手を贈りたい。

茨城新聞　2016年10月19日付朝刊を読んで

青い海と晴天の空が広がる護岸で和気あいあいと給食を楽しむ児童と教職員

【怒和島の給食】（松山市）

島彩々 ㉞

忘れない この仲間 この古里

どこまでも広がる青い空と海。遠くを見渡せば島々が浮かぶ。松山市沖の怒和島にある怒和小からの絶景だ。昼時に海岸沿いから子どもの楽しそうな声が聞こえてきた。同校では毎週水曜、外で海を眺めながら給食を食べる「海テラス給食」をしている。

午後0時15分、午前中の授業が終わると、体育館横の海岸に児童が集まってきた。児童9人を含め、計15人の小規模校。海テラスと呼ぶ護岸に全員で日よけや机、座布団を置き、食事をよそう。この日のメニューは野菜炒めにヒジキの白あえなど。学校で作ったタマネギや島で採れたヒジキを使い、調理員の中野かをりさん(56)が腕を振るった。

「いただきます」。涼しい風に吹かれ、波の音が聞こえる中、おしゃべりをしながら味わう。「1、2、3…」。目の前のクダコ島との間を通る船の数を数えたり、刻々と変化する雲の形を眺めたり。4年矢野孝成君(9)は「海や島の見え方はいつも変わるし、外で食べる給食は普段よりおいしい」と楽しむ。食べ終われば水遊びの時間。見つけたカニを先生に見せていた。

海テラス給食は3年前から始まった。4～10月ごろまで実施する。山口斗志校長(55)は「毎週楽しみにしてくれる。大人になっても美しいふるさと、生まれ育った島を必ず思い起こしてくれるはず」と目を細める。

島に中学はない。卒業すれば隣の中島で寮生活を送る。6年矢野あかりさん(11)は「この学校だからこそできる体験。みんなでここから見た海は絶対に忘れられない景色です」。18の瞳には瀬戸内海の原風景がしっかりと焼き付いている。（写真と文・山崎亮）

であい彩々

穏やかな海に小山の緑が映える丸子島

怒和島北東の上怒和港近くに、海にぽっかりと浮かぶ小山がある。丸子島と呼ばれ、悲しい伝説が残る。

旧暦の大みそかの夜、西国大名を乗せた船が丸子島の沖合で沈没し、丸子姫という美しい姫が亡くなった。以来、その日の午前0時ごろ、丸子島の海上に怪しい火がともるようになったという。

この時期は青い海に小山の緑が美しい。子どもの遊び場にもなっていて、寺岡友莉亜さん(9)は「火は見たことはないけど、潮が引いたら磯を渡って洞窟に行ける。友達と探検しています」と話していた。

連載「島彩々」は今回で終わります。

財満 純子さん

69歳 広島県

さわやかな青空の下、防波堤に大小の背中が15、並んで座っている写真に目を奪われた。朝刊1ページの2分の1ほどの大きな写真から、笑い声が聞こえてきそうだ。何をしているのだろうと下段の記事を読むと、島の小さな学校の全校生徒と先生たちの給食風景だった。どうりで、日よけの下にお行儀よく並んだ背中たちが楽しそうにおしゃべりしているわけだ。この学校では3年前から週1回、給食を外で食べるようになり、「海テラス給食」と呼ぶらしい。島で採れる食材を使った、顔の見える調理員さんの手作り給食。きっとおいしいはず。

島の小学校を卒業すると、全員が隣の島で寮生活になるそうだ。潮風と波の音に包まれて、目の前を通り過ぎる船の数を数えておしゃべりの輪が広がっていく。こんなすばらしい原風景を持った子どもたちは、心にも栄養を蓄えていくと思う。この子どもたちの未来を思うと、何だか心が温かくなる。

中国新聞　2016年6月26日付朝刊を読んで

記事を書いた中国新聞社映像部の山崎亮写真記者から

防波堤からの眺めは、まさに瀬戸内の美を象徴する光景でした。残念ながら学校は児童数減少で、2年後に休校の予定です。離島の過疎化という問題も潜む中、楽しかった給食の思い出と古里の景色が、いつまでも児童の心に残るよう願っています。

子どもたちにラジオ体操の手本を示す隊員たち　＝17日、出水市上知識町

怪しいヒーロー「西出水爆笑戦隊」
ラジオ体操"指南"
夏休みに子ども会巡回

ラジオ体操は楽しく正しく―。出水市の西出水小学校区で活動するご当地ヒーロー風グループ「西出水爆笑戦隊」が、夏休み期間中に地域の子ども会を巡回し、体操の"お手本"を示している。加齢のせいか動きにキレがないが、隊員たちは「夏の思い出に」と爽やかな汗を流している。

……

夏休みは校区内に約30ある子ども会のラジオ体操会場を巡回中だ。ヒーローは体操の楽しさを伝え、悪役はきちんと体操しない子どもに"お仕置き"する役目。17日朝は同市上知識町の八幡公園で、八幡子ども会と一緒に体を動かした。突然の登場に、目を丸くする子どももいた。

ただし活動4年目とあって、新鮮味が薄れつつあるのも事実だ。この日も一部の子どもたちよりも先にスタンプに並ぶ隊員たちから「昨年より元気がなかったね」と心配する声が。正義の味方なのに悪役風の「ヒュー」という声を出すなど、キャラクター設定も揺らいでいる。最近は「失笑戦隊」と呼ばれることもある。

「最初は子どもたちの食いつきがすごくて、自分たちの周りに人だかりができて並ばせるのに苦労した」と懐かしむ悪役1号。レッドは「子どもたちがわくわくし、大きくなった時に思い出の一つとして振り返ってくれれば」と話している。（吉永亮治）

大塚 雅子さん
53歳 鹿児島県

「頑張ったら仮面ライダーになれるよ」

そう言った途端に、どれだけのエネルギーが生まれてくるのだろう。瞳には力がみなぎり、いつもの2倍速くらいで動き、あれだけ嫌がっていたことをあっと言う間に終わらせてしまう。子育て中に、お世話になった戦隊ヒーローの名前は数えきれない。今は、保育士をする中で、戦隊ヒーローの名前にお世話になっている。子どもたちに、やる気を持たせる魔法の言葉なのだ。

「西出水爆笑戦隊」。キレがなく、お腹にたっぷりと肉をため込んだ、またの名を「失笑戦隊」。子どもたちと一緒にラジオ体操をし、カードにスタンプをもらうために並ぶ。なんともシュールな絵面に大爆笑なのだが、大人が早起きをして戦隊ものの服を着込み、ラジオ体操することのカッコ良さにすぐに気付かされた。いつの日か、「僕は西出水爆笑戦隊になる」。必ず、そんな日が来ると思う。

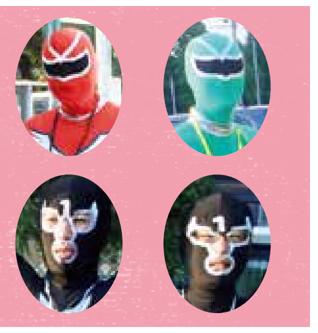
後継者が育つまで、頑張れ!

南日本新聞　2016年8月18日付朝刊を読んで

HAPPY NEWS PERSON

西出水爆笑戦隊の皆さんからのコメント

「地域に笑いを振りまき、明るい話題を提供したい」。そんな気持ちでスタートした西出水爆笑戦隊。ラジオ体操も4年目。「まさか世の人をHAPPYにするなんて」狙い通り。みんな!これからも頑張ろう。「ヒィー!」



もう一度陸上トラックへ
三段跳び元日本女王 中尾さん 練習で大けが
車いす競技者、指導者めざす

リハビリの一環で、菊陽町のショッピングセンターを訪れた中尾有沙さん＝菊陽町

こもれびの詩

昨年の陸上日本選手権女子三段跳びで優勝し、表彰台で笑顔を見せる中尾有沙さん(中央)　＝新潟市のデンカビッグスワンスタジアム(岩崎健示)

瀬尾 友信さん
67歳 熊本県

朝食を終え、新聞を開いてこの記事が飛び込んできた。中尾さんの活躍については、これまでも新聞記事を通して知っていた。恵まれた体格とはいえない中尾さんが熊本の地で頑張っている姿に敬意は持ちつつも、熊本のローカル選手としての視線で見てきた。だから、記事の右下の写真を見たときは正直びっくりした。

私にとっての中尾さんの情報はこの優勝でストップしていたので、中尾さん本人の心境を推し量ることはできないが、事故に挫折せず、今後の人生設計をきちんと見据えていることには感動した。

私は退職と同時に腰痛に見舞われ、一時は歩くこともままならない状態に陥った。他を恨みもしたが、最後は自分自身で切り開くしか前は見えてこないという結論に至った。

これからも新聞紙面を通して中尾さんの活躍に接しつつ、自分自身の頑張りにつなげていきたいと思っている。

熊本日日新聞　2016年7月1日付朝刊を読んで

繰り返すけいれんや意識喪失。激しい痛みが全身を襲う。米子市博労町3丁目の青木美奈さん(22)は、原因や発症の仕組みが分からない複数の難病を抱える。国内では珍しい事例で、死と直面する毎日。なのに、悲愴感はない。おしゃれな入院着を商品開発したり、難病患者の女子会を企画したり…。「人生で今が一番楽しい」。あらゆる障害にも果敢に、朗らかに立ち向かう。（田村彰彦）

「人生は強行突破で」
複数の難病抱える青木さん 米子
入院着開発や女子会を企画 朗らかに立ち向かう

遠藤 知加子さん
45歳 鳥取県

「今が一番楽しい」という。死と直面する毎日にも悲愴感はない。

「この体では結婚も難しい。来世で楽しむかな」「余命を考えても仕方がない。一日の中で少しでも元気な時間があれば、楽しみを見つけないと」。大変な難病を抱えている人が、なんて前向きなんだろう。とても辛い思いでいっぱいなのに。私だったら青木さんのようにポジティブに生きていくことができるだろうか。いや、多分できないだろう。

青木さんの、ほんの少しの時間でも楽しもうとする姿勢にとても心を動かされ、もっと何事も前向きにならないといけない、と実感しました。ほんの少しの時間も無駄にしないように人生を楽しもう、とこれを機に決意しました。

青木さん、気付かせてくれて本当にありがとう。

日本海新聞　2016年9月15日付朝刊を読んで

2016年9月28日

金口木舌

2016年10月26日

金口木舌

儀間 真治さん
68歳 沖縄県

9月28日と10月26日の「金口木舌」を読んで謎が解けた。心が温まる情景を思い出した。僕は1972年に就職し、休憩時間には国際通りを散策していた。毎日のように老人が子どもの手をとり、二人で通りを散策しているのを見かけた。誰の目にもその子は障がい者であることがわかる。母親ならわかるが、父親が手を引き歩いているのは珍しかった。

当時の世相では、障がいのある子を連れて歩くことは、身内の恥をさらすようではずかしいことだが、父親が堂々としていたのが昨日のように強く印象に残っていた。しばらくして二人を見かけなくなった。何も気にしていなかったが、このコラムで、父親は他界し、今は兄弟が父親に代わり散歩を引き継いでいるということがわかった。

今日、障がい者を街で見かけることは普通の風景だ。何でもないことが、何でもないと感じられる時代になった。心温まるコラムである。

琉球新報　2016年9月28日付朝刊、10月26日付朝刊を読んで

笑顔のある風景 ③ 相模原事件、障害者と家族

舘野ゆかりさん(51)＝東京都目黒区

家族で補い合い生きる

ダウン症の次男匠吾(12)は小学校入学から6年生まで、通常学級に通っています。最初は教室までついて行きましたが、3年生の時に「ママ、もういいよ」と宣言して一人で通うようになりました。気持ちの成長を感じることができて、うれしかった。

今は自分のペースで漢字を覚えたり、ダンスを習ったりしています。近所のラジオ体操にも参加して、交友関係が広がりました。

私が落ち込んでいると「そばにいるよ」と励ましてくれます。夫とけんかをしたときも「僕がパパとお話してくるね」と仲直りに乗り出してくれるんですよ。

6歳上の長男は思春期の真っただ中なのに、弟と一緒にいると写真のように柔らかな笑顔になります。

通常学級に入れたのは、多くの友達と共にさまざまな経験をしてほしかったからです。「たてのしょうご」という名前を地域の人たちに知ってもらいたいという思いもありました。

一方で、正直言えば「周囲からどう思われているのだろう」という恐れや緊張がなかったわけではありません。でも、楽しそうに生きるしょうちゃんから「自由でいいんだ」と教えてもらい、気持ちが楽になりました。

障害がない私たちだって完璧な人間ではないので、家族みんなで補い合って生きています。手を差し伸べてくれる人もいます。写真の笑顔が私たちの幸せの形です。

右から舘野ゆかりさんとダウン症の次男匠吾さん、長男。2013年の春休みに家族4人で外食に出かけたとき、夫がスマートフォンで撮影した（全国手をつなぐ育成会連合会提供）

伊藤 久美さん
49歳 佐賀県

ダウン症の記事かと読み始めましたが、瞬間に涙が出てきました。「夫とけんかをしたときも『僕がパパとお話してくるね』と仲直りに乗り出してくれるんですよ」の一文に、じわっと泣けてきました。何だかうらやましく思えました。短い文章なのに、いかに匠吾君が家族の絆を深めているのかがわかりましたし、なんと言っても、この笑顔の親子写真が心を温めてくれると思います。

この記事を読み、障害のある子が生まれても、その先の人生はより実りの多いものになるかも、と前向きな気持ちになりました。

いろんな人が生きているから社会なのだと思います。「障害がない私たちだって完璧な人間ではない」との匠吾君のお母さんの言葉が、私に勇気をくれます。

佐賀新聞　2016年9月27日付朝刊を読んで

一ノ瀬 明男さん
61歳 東京都

落とした財布が無事本人に戻ることは、日本では珍しいことではない。私自身も二度ほど拾った財布を届けたことがある。二度とも本人に戻り、感謝された。今回の拾得物の記事もそんな日常のひとコマかもしれないが、落とした人はミャンマーからエンジニアを目指して来日した、21歳の新聞奨学生・ミュジャさん。金額は約7万円。当面の生活費として農業を営む父が田んぼを半分売って作ってくれたお金。祖国では12歳から27歳の6人の姉妹がいて、「少しでも家族の暮らしを楽に」という思いの矢先の出来事。無事に届けられ、感謝の言葉と共に「日本人を手本にしたい」と語った。ちなみに拾得者は、報労金の請求も放棄して名前も名乗らず立ち去ったという。

ミュジャさんの今後の人生にエールを送りたい。

毎日新聞　2016年4月7日付朝刊を読んで

落とした7万円戻る

日本人手本にしたい

ミャンマーから来日ミュジャさん

西早稲田

ミャンマーから新聞奨学生として来日したミュジャさん(21)が都内で紛失した現金約7万円入りの封筒が、匿名の拾得者を介して無事に戻ってきた。ミュジャさんは「日本人は拾った物を必ず届けると聞いていたが、これほど高額でも戻ってくるとは。本当に驚いた」と、感謝の念を深めている。【加藤隆寛】

エンジニアになる夢をかなえるため、ミュジャさんが来日したのは3月22日。同26日午後、新宿区大久保の施設で研修を終え、配属先の毎日新聞駒沢販売所（世田谷区）に到着した後、リュックの中にあるはずの封筒がないことに気づいた。

「ありえないこと。パニックになってしまった」。封筒に入っていたのは6万2000円と95ドル（約1万円）の紙幣。カチン州で農業を営む父が、田んぼを半分売って工面してくれた当面の生活費だった。日本の紙幣に合うサイズの財布をまだ持っておらず、全財産を封筒に入れて持ち歩いていた。

「父に申し訳ない。家族の幸せのため、大事な田んぼを売ってくれたのに…」。祖国では両親のほか、27〜12歳の6人の姉妹が待つ。経済的理由や内戦事情により、夢をあきらめた姉もいる。「少しでも家族の暮らしを楽にできれば─」。思い描いた夢に踏み出そうとした矢先の試練に、打ちのめされそうになった。

研修から同行していた同販売所の堀将一所長(38)は、相談を受け「駅の切符売り場で電子マネーの入金をした時に落としたのでは」と思い当たった。地下鉄副都心線・西早稲田駅に電話したところ、届けられていることが判明。拾得者は駅員に名乗らず、遺失物法で認められた報労金（謝礼）の請求権も放棄すると伝えていたという。

ミュジャさんは拾得者について「とても心の白い人。他人の心を理解できる優しい人だと思う。私もあなたを手本にして精いっぱい生きていきたい」と話す。

奨学生として2年間、語学校に通いながら新聞配達に励んだ後、日本の大学に進学するつもりだ。「拾ってくれた人だけでなく、所長や駅員の皆さん、日本国民の全員にもお礼を言いたい。夢のためにしっかりと頑張ることで恩返しできれば」と決意を新たにしている。

戻ってきた封筒を手に、匿名の拾得者への感謝を語るミュジャさん＝新宿区で

川口 辰雄さん
64歳 福岡県

ドラマは神奈川県の男子学生・野田さんが、JR南武線の車内でスマートフォンを紛失したことから始まる。その電車はスマホを紛失した翌日に日本でのラストランを終え、思いがけずにインドネシアへ譲渡されることになる。スマホは車内に取り残されたまま、約5800キロの長い旅に出る。

譲り受けたインドネシア側ではジャカルタ首都圏鉄道会社の整備士シャハリ・ロフマットさんが、走行前の点検・清掃中に偶然にもスマホを発見する。スマホケースのポケットには学生証が入っており、ロフマットさんはそれを頼りにツイッターに掲示して協力を呼び掛ける。仲間の日本人駐在員の協力もあり、スマホは7か月ぶりに持ち主の野田さんのもとへ戻る。

たまたま紛失したスマホが、まったく面識のなかった二人の出会いを生んでいる。小さなスマホと偶然が織りなすすてきなドラマ。こんなことが実際にあることに感動した。また、二人の交流が話題となり友人の輪が広がろうとしている。とても素晴らしいことだ。

読売新聞　2016年10月6日付夕刊を読んで

紛失スマホ 海越え友情

中古電車に乗りインドネシアへ

鉄道マン発見 落とし主に返却

日本からインドネシアに輸出された中古電車が、思いがけない出会いを生んだ。電車が日本を走っていた頃、神奈川県の男子学生が車内でなくしたスマートフォンが、約5800キロ離れたジャカルタで、ひょっこり出てきたことがきっかけだ。スマホはこの夏、7か月ぶりに持ち主のもとへ戻り、発見者のインドネシア人鉄道マンと、落とし主の学生は、海を越えた友情をはぐくんでいる。（ジャカルタ支局 池田慶太、国際部 溝上隆悠）

スマホを見つけたのは「ジャカルタ首都圏鉄道会社」の整備士シャハリ・ロフマットさん(24)。昨年12月下旬、日本から輸出されたJR南武線（川崎市─東京都立川市間）の中古車両を、走行前にジャカルタの港で点検・清掃していた。座席下を確認するため細長いシートを外すと、「床に落ちている1台のスマホが目に入った」。どうやら、背もたれとシートとの隙間に挟まっていたらしい。

スマホケースのポケットには、日本人の物らしき学生証が入っていた。落とし主だろうとは思ったが、日本語が読めない。困ったロフマットさんは簡易投稿サイト「ツイッター」に学生証の写真を掲示し、協力を呼びかけた。

ロフマットさんは日本の鉄道が好きで、日本で走る電車の絵柄をプリントしたTシャツを自作し、社内で着るほど。アジアに駐在する日本人とも交流がある。呼びかけはインドネシア語だったが、鉄道ファン仲間の日本人駐在員の目に留まり、学生の通う大学と連絡を取ってもらうことができた。持ち主は神奈川県座間市の横浜国立大4年野田翔太さん(21)だとわかった。

＊

「あなたの物ですか」

野田さんのフェイスブックに英語のメッセージが届いたのは1月11日のことだった。学生証の画像も添付してあったため、ピンと来た。

約5週間前の昨年12月5日、南武線でスマホと学生証をなくしていた。連日JRに問い合わせ、警察に遺失届も出したが見つからない。仕方なく学生証を再発行し、古いスマホを引っ張り出して渋々使っていた。

なぜ、自分のスマホがインドネシアで発見されたのかは、後でわかる。JR東日本横浜支社によると、同社は昨年、南武線「205系」の中古車120両をインドネシアに有償で譲渡した。スマホが見つかった車両は、そのうちの1両だった。野田さんが乗車した翌日、日本での走行を終え、「第二の人生」に向けて搬送準備に入ったという。

＊

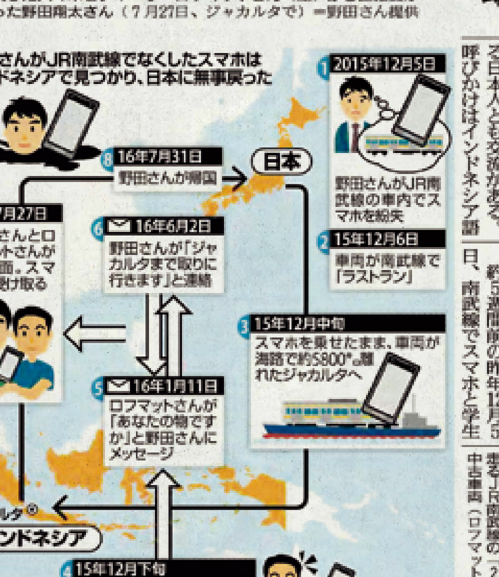
野田さんは、ロフマットさんにスマホを国際郵便で送ってもらおうとしたが、インターネットの翻訳機能を使ったやり取りでは、うまく意思が伝わらず、断念。就職活動を終えた6月、「やっぱり自分で取りに行こう」と決めた。

7月27日、2人はジャカルタの駅で初めて会い、野田さんはスマホと学生証を受け取った。2人を結びつけた「奇跡のスマホ」のカメラ機能を使って、一緒に記念写真も撮った。

8月にはロフマットさんが東京を訪れ、野田さんとともに都内周遊を楽しんだ。日本に滞在中、ロフマットさんが電車の網棚に土産の入った袋を忘れるハプニングもあったが、「最寄り駅に駆けつけると、駅員室に無事届けられていた」（ロフマットさん）という。

2人の交流はインターネット上で話題となり、野田さんのフェイスブックにはインドネシアの鉄道ファンなどから「友人になろう」とたくさんの連絡が届いている。野田さんは「このスマホと新しい友情は宝物」と話している。

紛失したスマホをシャハリ・ロフマットさん（左）から直接受け取った野田翔太さん（7月27日、ジャカルタで）＝野田さん提供



日本から譲渡され、ジャカルタを走るJR南武線の「205系」の中古車両（ロフマットさん提供）

中古車両 世界へ輸出

日本の鉄道会社は、高性能車両へのモデルチェンジなどで不要になった中古車両を世界に輸出している。

インドネシアはかつて新しい電車を輸入していたが、1990年代後半の経済危機に伴う財政難を受け、日本からの中古車両に切り替えた。ジャカルタ首都圏鉄道会社は2009年以降、JR南武線のほか、東京都営地下鉄などを走っていた844両を有償・無償で日本から譲り受けた。

アルゼンチンの首都・ブエノスアイレスの地下鉄では、東京メトロ丸ノ内線を走っていた車両が活躍している。「日本の鉄道は安全性や省エネルギーの観点で国際的な評価が高い」（国土交通省）という。

日本政府はインフラ（社会基盤）の海外輸出を成長戦略の柱に位置付けている。14年の海外受注実績は約19兆円で、20年に約30兆円に伸ばす目標を掲げている。このうち7兆円は交通分野で見込む。

亡き母から年賀状

20歳迎えた我が子へ 「これから進む道を必死に生きて」

幸せおすそわけ

川南の永友拓弥さん

温かさ触れ 決意新た

「20歳の我が子へ─」。今年、成人を迎えた川南町川南、会社員永友拓弥さんの元に、2012年3月にがんのため46歳の若さで亡くなった母直美さんからの年賀状が届いた。母は「これから進む道を必死に生きてほしい」と、大人になった息子へ、励ましの言葉をつづっている。永友さんは「字の癖や言葉の使い方。久しぶりに母を近くに感じることができた。甘えん坊だった子どもの頃を思い出す」と頬を緩める。

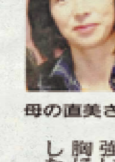
年賀状は永友さんが小学6年だった8年前、担任が保護者に呼び掛けて企画。当時のクラスメートが20歳を迎える年に郵送され、永友さん宅にも元旦に届いた。その年賀状は差出人不明だったが、手に取った瞬間に懐かしさが込み上げてきた。「とってもマイペース」「バスケットに夢中な子」。「6年生のたっくん」へ宛てた文面に、優しい母の顔が浮かび上がる。「タイムカプセルを開けたみたいだった」と永友さん。母の温かさに触れ、胸がいっぱいになった。

母の異変を感じたのは、中学3年の時だった。「決して弱音は吐かない、強い母だった」といい、入退院を繰り返しながらも「風邪をひいた」と気丈に振る舞っていた。だが、卒業を間近に控えた時、全身にがんが転移し、末期だと知った。それから間もなく、母は息を引き取った。卒業式の2日前だった。

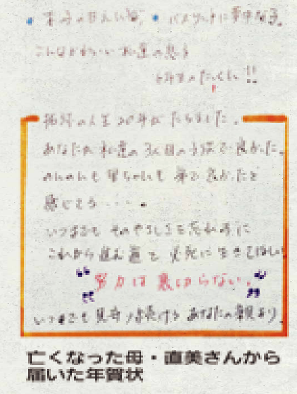
永友さんは高鍋農業高を卒業後、地元企業に就職。「母が思うような大人になったかな」と、社会人2年目の自身に問い掛ける日々だ。異動による環境の変化や持病のアトピー性皮膚炎の悪化で「辞めたいと思うことは何度もあった」。そんな弱気な自身を予見していたように年賀状の中の母は呼び掛ける。「努力は裏切らない」

3日にあった同町の成人式で永友さんは司会の大役を見事にこなした。「母以上に苦しい思いをした人はいない。アドバイスを胸に、マイナスをプラスに変えられるような強い人間を目指す」。決意を胸に、大人への一歩を踏み出した。（坂元穂高）

「母のように強い人間になる」。亡き母から届いた年賀状を手に決意を新たにする永友さん＝川南町川南



母の直美さん



亡くなった母・直美さんから届いた年賀状

肥田木 真規子さん
36歳 宮崎県

私は中学校教員をしています。今年のお正月、生徒から年賀状が届きました。生徒から届いたことがとてもうれしく、そのお礼を学級通信に書いていたとき、この記事を見つけました。

「こんな年賀状があったのか…」と思い、生徒にも紹介すると、生徒たちは静かにその記事を読み始めました。亡き母からの年賀状は、20歳を迎え、ときには仕事を辞めたいと弱気になることもあった永友さんを、何よりも励ましてくれたことでしょう。息子を思う母の気持ち、「いつまでも見守り続けるあなたの親より」と書かれた最後の言葉に胸があつくなりました。

宮崎日日新聞　2017年1月9日付朝刊を読んで

社会的養護

「声なき声」を取材したい

報道部 古瀬 小百合(24)

ニュースを見詰めて 新聞週間に寄せて ⑦

憧れだった新聞社に入社して半年。初心者マークが外れない新人記者だが、胸に秘めた理想はある。それは「社会の声なき声を取材し記事にすること」。

入社試験で面接官に「君は本当にそんな仕事ができるのか」と言われ、「やります」とたんかを切った。でも現実は甘くない。入社後は日々の業務に追われ、「理想」はほこりをかぶっていた。そんな時、B君(19)と出会った。

7月の参院選で若者に政治意識を聞く企画取材だった。B君は親元を離れなければならない事情を抱え、小学1年から県内の児童養護施設で生活している。家庭のぬくもりを知らずに過ごした青春期。来春、施設を出た後も一人で生きていくという。「頼る人もいないので」と彼は言った。

自分の力だけではどうにもならない現実。それでも必死にあがいて生きていこうとするB君の言葉をノートに書き留めながら、私は恥じていた。自分自身、たいした挫折も知らずに生きてきた。それなのに「声なき声を取材する」なんてよく言えたなーと。

取材が終わって、B君が不意に「話して良かった。聞いてくれてありがとうございました」と言った。重い荷物を下ろしたようなすがすがしい表情に見えた。私の中で忘れかけていた思いがよみがえった。

B君のような社会的養護が必要な子どもは全国に約4万人、県内には約500人いる。多くの子どもが施設で暮らしている。国は、2030年までに里親を増やすなどして「養育の小規模化」を図る方針だ。どうすれば子どもたちが安心して生きていけるのか。簡単に答えは出ない。取材を続けようと思う。

B君の記事が出た後、「支援をしたい」という人が現れた。B君が初めて他人に打ち明け、私が書いた記事が誰かを動かした─。そう思うと心が震えた。たとえ小さな一歩でもいい。その積み重ねの先に「声なき声」をくみ取れる社会があると私は信じている。

─おわり─

どうすれば子どもたちが安心して生きていけるのか。「声なき声」を取材したい（写真はイメージ＝則行優志撮影）

小林 香さん
46歳 長崎県

心を揺さぶられた。理想と現実の間で自分の力のなさを嘆いたり、日常に忙殺され理想を忘れたりする。そんな中でもチャンスはやってくるのだ！そうだよ！

40歳にして、念願の学校図書館司書という仕事に就いた。理想と現実のギャップにある程度の覚悟はしていたが、ふと「本当に私は必要とされているのだろうか」とむなしさを感じることも。そんな時にこの記事に出合った。

そうだ、たとえ小さな一歩でもいい、幸せは私一人からはじめたらいい。「思い」を持って、「理想」を持ってやっていこう！この記事の記者は、理想をちゃんと心の奥の大切なところに持ち続けていたのだろうな。B君の思いを受け止め発信して、そして社会が動いている。なんてすごいのだろう、言葉とは。この新人記者とこの記事に、温かな感動をもらったことを心から感謝している。

長崎新聞　2016年10月21日付朝刊を読んで

HAPPY NEWS 2017 募集要項

想像もしていなかった出合いやきっかけを与えてくれた記事、あなたをHAPPYな気持ちにしてくれた記事に、コメントを添えてお送りください。

【 応募要領 】▽読んだ紙面の掲載日、掲載紙名、朝・夕刊の別▽コメント(200字から400字程度)▽郵便番号▽住所▽氏名▽年齢▽性別▽職業▽電話番号を書いてご応募ください。新聞紙面は、「紙面の切り抜きを同封して郵送」「紙面を撮影した写真をコメントに添付して送る」のいずれかの方法でお知らせください。

【 応募対象と締め切り 】2017年3月1日～2018年2月4日の新聞に掲載された記事や写真、広告。応募締め切りは2018年2月5日(月)必着 ※2018年2月5日～28日の紙面をもとにした作品は、2月中も応募を受け付けます。

【 応募方法 】◆大学生のみなさん○大学生の作品は、一般部門と大学生大賞(個人)の対象として審査します。○ゼミやサークルなどグループ(2人以上)で応募した場合、作品は一般部門、大学生大賞(個人)の両方で審査され、応募したグループは、大学生大賞(グループ)の審査対象となります。○大学名・学年、グループ応募の場合はグループ名をお知らせください。◆小中高校生のみなさん○親子やきょうだいなど、家族で取り組んでください。

http://www.yondoku.com よんどく!

このページをポスターとして教室や街の掲示版に貼ってね!

HAPPY NEWS 家族賞(全3件)

古川さん兄弟 愛知県

かあちゃん桜色メダル

7人制ラグビー 兼松選手

娘に感謝「普通の母に」

長女明日香さん㊨から「桜の金メダル」を首にかけてもらう兼松由香選手＝8日、リオデジャネイロで（中野祐紀撮影）

桜のジャージー姿のまま、かあちゃんは娘を抱きしめた。八日（日本時間九日）、地元ブラジルとの順位決定戦に敗れ、十位が決まったラグビー女子7人制の日本代表「サクラセブンズ」。会場を去る最年長の兼松由香選手(34)＝名古屋市＝は、応援に訪れた「あーちゃん」こと長女の明日香さん(9)に「普通のかあちゃんになるよ」と語りかけた。（中野祐紀）

ブラジル戦での出番はわずか一分半だったが、全力でフィールドを駆けた。「幸せですね」。試合後、十五年近い代表歴に幕を下ろすと明かし、「残りの夏休みは一緒にプールに行ったり宿題をやったりする。そんな夏は初めてだから、楽しみ」。

愛知教育大生だった二〇〇二年、鋭いタックルと正確なキックを買われて15人制ワールドカップ（W杯）に出場。〇七年、前年に結婚した修さん(38)との間にあーちゃんが生まれたが、夫の理解と両親の助けを得て産後一カ月でフィールドに戻った。だが、〇九年の7人制ドバイW杯は右ひざのけがで欠場する。一二年の国際大会、香港セブンズも右ひざ手術で諦めた。「二度と大きな舞台に立てないかも」。心が折れかけた時、四歳だったあーちゃんが手紙をくれた。

「かあちゃん、あしがなおたら（治ったら）まただぐびい（ラグビー）できる」。ぐにゃぐにゃの「へたっぴな字」に支えられ、また走り始めた。

初の五輪は最後の大舞台になった。兼松選手にあーちゃんは手作りの賞状を読み上げて贈る。「オリンピックをとてもよくがんばりました。かあちゃんのタックルはいちばんよかったです」。それから「桜の金メダル」を首に。穏やかな笑みをたたえて、何も言わず、あーちゃんの頭をくしゃっとなでた。

兄・重人 さん
14歳

由香選手が右ひざのけがで心が折れかけていた時に、あーちゃんが書いたお母さんをはげますための手紙を読んで自分も感動してしまいました。親子の「きずな」というものは自分に元気をくれることと、はなれていても心はつながっているということを、このあーちゃんの手紙を読んで思い出しました。これを機に、いつか自分が大きくなって子どもができたら、その「きずな」を忘れないようにしたいです。

弟・知優 さん
12歳

この新聞を読んで思ったことは、親子というのは友情とはちがい、親子だからこその考え方があり、それが一番の支えになるんだなということです。由香選手は試合にもあまり出られずけがで入院してしまって、ワールドカップも出られずに絶望したと思います。でもあーちゃんはお母さんに試合に出てほしくて、あの手紙を出したんだと思います。

それで由香選手は試合に出られました。このことから、子どもというのは大人の支えになる存在で、子どもがいるからこそ親はがんばれるんだと思います。

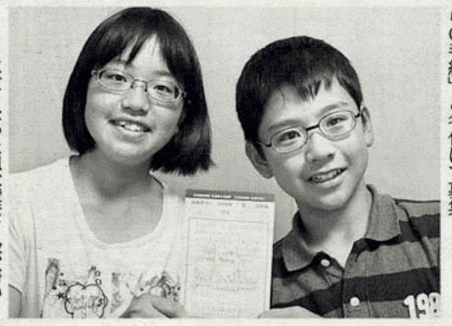
中日新聞　2016年8月10日付朝刊を読んで

泉水さん親子 北海道

10年前の手紙 届いてますか

06年札幌・こども博会場発

亡き祖父から孫へ「奇跡」■宛先不明千通 連絡を



2月に亡くなった祖父俊彦さんが書いたはがきを手に笑顔を見せる須田真朋さん（左）と真翔君

札幌商工会議所は10年前に札幌市内で開いたイベント「こども未来博」で、来場者が自分自身や家族に宛てて書いたはがきを今夏、届けている。夢や愛情を込めて書かれたはがきは7307通で、うち1108通が宛先不明で返送された。会議所は「10年前と宛先が変わった人は連絡を」と呼びかけている。

はがきは2006年、会議所が月寒グリーンドーム（当時）で開いた「こども未来博」で「未来ポストからの手紙」と名付けて募集した。来場者が自分自身や大切な人に宛てて専用はがきにメッセージを書き、会議所は10年後の今年7月に郵送した。

自分の将来の夢を書いた人が目立つ中、孫にメッセージを残した人も。江別市の中学1年須田真朋さん(12)と、小学5年真翔君(11)のきょうだいには、今年2月に膵臓がんで76歳で亡くなった祖父俊彦さんからはがきが届いた。

「まほちゃんは歌が上手になっていると思います」「まなとくんはスポーツなどで日に焼けて元気な男の子になっているでしょう」などと書かれていた。2人とも俊彦さんから届くことは知らず、真朋さんは「亡くなった年に届くなんて奇跡」と驚き、真翔君は「書いている内容が今の自分たちと重なっていて感動した」と目を潤ませた。

返送されたはがきの中には「学校のせんせいになりたい」などの将来の夢や「10年後には銀婚式ですね。仲良く暮らしていますように」と妻が夫に宛てたメッセージなどがある。会議所の片岡直之産業部長は「心温まるものばかり。1人でも多く届けたい」と呼びかけている。

住所変更は電話で受け付ける。はがきに書いた夢を実現し、テレビなどの取材に協力できる人を22日まで募集している。問い合わせは会議所☎011・231・1373へ。

母・亜紀 さん
39歳

亡き祖父からの手紙。それも、亡くなった年に届き…そして将来の姿は、現在の自分と重なっている…。私は自然と胸があつくなり、涙がこぼれ感動しました。この祖父はきっと、かわいい孫を温かく見守っているにちがいないですね。私は亡き自分の祖父母を思い出しました。現在二人の子どもを授かり、あらためて両親に感謝する気持ちになりました。あたりまえの毎日ではないことに気付かされ、そんな記事と出合い、ありがとう！！また1日1日、家族との時間を大切に笑顔で過ごしていきます。

娘・陽菜 さん
11歳

この記事の真翔くんと同じ学年で、自分には、いつも、おじいちゃん、おばあちゃんがそばで見守って、甘えさせてくれる環境であることがあたりまえに思っていた。それがこんなにも幸せなことであることに気付かされました。これから、さらにおじいちゃん、おばあちゃんに笑顔を贈れるよう勉強などがんばり、笑顔を見せてあげたいし、たくさんありがとうを言いたいです。

北海道新聞　2016年8月16日付朝刊を読んで

瀬底さん姉妹 沖縄県

介護職 過酷16時間夜勤

老健施設 ルポ

超高齢社会を迎え、お年寄りや家族を支える介護の担い手確保が待ったなしだ。政府は今月にまとめる1億総活躍プランで対策を打ち出すが、過酷な労働、低賃金で職場を去る人は後を絶たない。仕事への誇りと現実のはざまで、奮闘する人たちを追った。

老人保健施設で、お年寄りの食事を介助する介護福祉士の辻井聡さん（仮名）＝3月下旬、東京都内

分刻み 呼び出し音70回超

静まりかえったフロアに鳴り響く呼び出し音。息つく暇もなく、分刻みの介護対応が続く。3月下旬、東京都内の老人保健施設（老健）で、16時間におよぶ過酷な夜勤に密着した。

午後5時半。食堂で夕食の配膳が始まった。「今日はキンメだよー」。介護福祉士の辻井聡さん(43)＝仮名＝は車いすの女性2人の間に座り、ペースト状のおかずをスプーンで交互に口元に運ぶ。

入所者の多くは90代〜100歳以上で、認知症の人も目立つ。車いすから何とかして立ち上がろうとする人。「おかわりー、おかわりー」と叫び続ける人。握りやすくした「自助具」と呼ばれるスプーンを使う人以外は自力で食べられず、食べ物を喉に詰まらせないように注意が欠かせない。食後に薬を飲ませ、口の中を洗い、各部屋のベッドに移動させる。

誇り・感謝の言葉 やりがいに

老健は「ついのすみか」とされる特別養護老人ホームと異なり、医療やリハビリが必要な人を受け入れている。辻井さんが働く施設は2フロアに50床ずつあり、夜間は介護士2人、看護師1人の体制。辻井さんは月に4、5回の夜勤をこなす。

午後9時前。ようやく夕食を口にした途端、事務室のモニターに部屋番号が映し出された。電子音が"異変"を告げた。「足が痛い。薬を塗って」。「し尿瓶を空にしてほしい」。部屋を巡回し、寝返りが打てない一人一人の体位を変え、枕やタオルを添える。

それが終わると今度はおむつ交換の時間だ。「ごめんなさいね」。薄暗い部屋で寝ている男性にそっと声をかけ、温めたタオルで陰部を拭く。筋肉がそぎ落ち細い枝のような体だが、ずらそうとすると、ずしりと重い。

排せつ介助は明け方まで2時間おきに計4回。一巡するだけで1時間の重労働で、だんだん息が荒くなる。その間もベッドから転落しそうになると鳴るアラームや、呼び出し音が絶えない。

午前2時。要介護4の女性(88)が何か訴えた。「どこが痛い？　おなかかな？」。答えを探りながら、体の向きを少しずつ変える辻井さん。痛みが和らぐと、女性は喉の奥から「あ、り、が、と、う」と絞り出した。

仮眠時間は2時間半あるが、この日休めたのは1時間半程度。「体を横にするだけ。眠れません」。窓の外がうっすら青白くなり始めた。着替え、朝食介助、日勤への申し送りを済ませ、長い勤務は終わった。

32歳の時に食品会社を辞めた辻井さん。おばあちゃん子で「お年寄りと関わる仕事がしたい」とこの世界に飛び込んだ。人手はいくらあっても足りず、夜勤明けは特にきつい。「こちらの意図を理解してもらえず、腹が立つこともある」と本音ものぞく。

それでも体が動くうちは辞めるつもりはない。人の命がかかった大切な仕事だという誇りと、お年寄りからの感謝の言葉があるからだ。一晩で耳にした呼び出し音は70回超。そして同じ数の「ありがとう」を聞いた。

姉・凛 さん
17歳

「もし、これ読んでたらひいばあちゃんもっと楽に生きていたかなぁ」と、妹から新聞記事を渡された。

「介護職　過酷･･･」の大見出しに、ベッドの上の曽祖母、施設の消毒液のにおいやスタッフの忙しい足音がよみがえり、読むことをためらったが「感謝」「やりがい」という中見出しが私を後押しした。そして最後の「呼び出し音の数だけ『ありがとう』」には、目からうろこが落ちた。

過酷な勤務をそう変換したことへの驚きと尊敬、そして感謝の念が押し寄せてきた。同時に体の痛みと介護福祉士への罪悪感に苦しみながら逝った曽祖母の死をどこか受け入れられずにいた私の心を溶かしていくような、温かいHAPPYが私を包んだ。

介護現場の実務的な厳しい業務だけでなく、目には見えない心のやりとりにスポットを当てて伝えてくれた。見出しのインパクトが重要なネットニュースでは、きっと出合えなかった。中見出しなど、新聞ならではのアシストで、最後に待ってたHAPPYにたどりつけた記事だった。

妹は天国の曽祖母に届けたいと言ったが、曽祖母だけじゃなく一人でも多くの人に届いてほしいと思う。そんな思いをくれたこの記事が、曽祖母が大好きだった私たち姉妹にとっての最高のHAPPY NEWSだ。

妹・蘭 さん
13歳

HAPPYとは真逆の気分になりそうな記事から逃げるように次のページをめくろうとした時、写真の老人の後ろ姿と「呼び出し音70回超」の文字で、介護施設で亡くなった曽祖母が浮かんで目と手が止まってしまいました。

体中の痛みが苦しくて、自力では身動きがほとんど取れなくなった曽祖母は、呼び出しコールのひもを「命綱」だと言っていつも手に巻きつけていました。

他の人よりも意識がはっきりしている分、介護スタッフの方を呼んでしまう回数が多いことに本人も罪悪感を感じていたし、母や祖母も見舞いのたびに謝っていたのを見ていたので、私はきっとスタッフにとって呼び出しの音の回数は、ため息の回数だろうと思っていました。でもこの記事には「呼び出し回数＝ありがとうの回数」だと書いてありました。「介護現場の大変さの回数＝届いた感謝の数」に変換してくれて、職員のやりがいとして伝えてくれました。とてもうれしかった。曽祖母にも届くなら、読んで聞かせたくなりました。

「もしかしたら、ひいばあちゃんの『ごめんね』と『ありがとう』は、一瞬でも介護スタッフの方たちのやりがいにつながった瞬間があったかも！難儀させてるだけじゃなかったかもよ」と。出合ってしまったと思ったはずの苦しい記事は、出合えて良かったと心からの温かいHAPPYな気持ちにさせてくれた記事でした。

沖縄タイムス　2016年5月4日付朝刊を読んで

HAPPY NEWS
大学生大賞
（個人・全3件）

君に笑顔 私の髪で

がんの治療や脱毛症で髪に悩む、18歳以下の子どもへの「ヘアドネーション」（髪の寄付）が、全国に広がっている。人毛100％のウィッグ（かつら）を贈る大阪市のNPO法人には連日、同世代の子どもから、何年も伸ばしてカットした髪が届く。贈る側と贈られる側。子どもたちの思いを髪がつなぐ。

ウィッグのカットを終え、鏡を見つめる空本菜未さん＝広島市中区

木村仁君。髪を寄付する前の写真パネルと並んでもらった＝千葉県船橋市、いずれも細川卓撮影

誰かに贈る サンタみたい

2回寄付した小5

「髪を伸ばしてうれしいことがあったから、ぼくの髪にはハッピーがいっぱい詰まってる。自分の髪だと思って過ごしてほしい」

千葉県船橋市の小学5年木村仁君(11)は昨年5月、長さ40ｾﾝﾁほどの髪を寄付した。小2の夏から、約3年間伸ばし続けてきた。寄付は2回目だった。

4歳の時、七つ上のいとこの昔の写真に驚いた。髪もまゆもない。「なんでつるつるなの？」。母は、がん治療の副作用で抜けたのだと教えてくれた。「何かできることはないかな」。母から髪の寄付のことを聞き、幼稚園年中の12月から2年半伸ばし、32ｾﾝﾁの髪を贈ったのが最初だった。

レストランで女子用のピンクの食器が出てきたり、商業施設の男子トイレで見知らぬ男の子に「女は入っちゃいけないんだよ」と注意されたり。でも「髪がない子の方がつらいはず」と、自分の意思で続けてきた。

自分の髪が誰かのためになるのは「サンタさんになったみたいでうれしい」。事情を知った友だちも「すごいね」と言ってくれた。2015年に体験をまとめ、小学校で他の学年にも読まれた。友人の妹も七五三を終え、髪を寄付した。

神戸市の小学4年若尾美空さん(10)は昨年8月に31ｾﾝﾁの髪を寄付した。ハリのある黒髪。「きれいな髪やな。おばあちゃんのかつらにしたいわ」と祖母に言われていた。大切に伸ばしてきたが、「もらった子が明るくなると思うと、決心できた」と言う。

NPO法人の事務所で髪の仕分けも手伝った。1日100～150人分の髪が届き、1割ほどが子どもからだ。若尾さんは「ウィッグづくりは思ったより大変。ヘアドネーションのことをみんなに知ってほしい」と自由研究で発表した。

かぶって外出 待ち遠しい

白血病と闘う高2

NPO法人は大阪市北区の「JHDAC」。代表の渡辺貴一さん(45)らが設立した。美容師として独立する際、「髪のプロフェッショナルとして社会に貢献したい」と思い立った。個人の頭の形に合わせて仕上げるフルオーダーのウィッグは通常、数十万円するが、工場などの協力で約10万円でつくり、無償で贈っている。資金も寄付などでまかなう。

「まゆが隠れるくらいのパッツンで」

広島市の美容室で昨年11月3日、市内の高校2年空本菜未さん(17)が、美容師の村上雅美さん(34)に髪形の希望を伝えた。JHDACから届いたウィッグを合わせる日だ。約1時間後、仕上がりを鏡で確かめた。「自分の髪みたいに自然」。顔がほころんだ。

急性骨髄性白血病と診断されたのは昨年7月。薬の副作用で髪が抜け始め、手で髪をすくと指に抜け毛がごっそり絡まる。「髪が抜けるのを見るとストレスになる」と看護師に言われ、バリカンで3ﾐﾘに刈った。外出時は市販の人工毛ウィッグを使っていたが、人に見られている気がして、いつも帽子をかぶっていた。

しかしJHDACのウィッグは人毛100％で、人工毛のようなテカりはない。治療は続くが、「ウィッグをかぶって出かける日が待ち遠しい」と話す。

広島市の高校3年の女子生徒(17)は同じころ、市内の美容室でJHDACのウィッグを「ボブ」と呼ばれる型にしてもらった。「めっちゃいい仕上がり。家族にも『似合ってるね』って言われた」

ふだんの外出時はニット帽をかぶるが、この後、贈られたウィッグで家族ともみじ狩りに行った。「人の目が気にならなかったのが一番うれしい」。脱毛は小学4年のころから。明確な理由は分かっておらず、「原因不明で悩む人がいることも知ってほしい」と話す。

（寺尾佳恵）

JHDAC
ウィッグつくり無償で提供

人毛のオーダーメイドウィッグを、髪に悩む18歳以下の子らに贈るため、2009年に設立されたNPO法人。Japan Hair Donation& Charityの略称だ。

17年1月14日現在、141人に提供し、127人が提供を待つ。髪の寄付は切り口から毛先までが31ｾﾝﾁ以上なら、白髪や色染めでも可能。約30人分の髪で、1人分のウィッグができる。女の子の希望が多い、ロングヘア用の50ｾﾝﾁ以上の髪が足りないという。

ホームページはhttp://www.jhdac.org/

今関 奈々子 さん
19歳　兵庫県

去年のセンター試験を思い出しながら読んだ朝刊で見つけた記事。部活を引退してから伸ばし始め、大学受験、卒業式、大学での新生活を共に過ごして今ではすっかり長くなった私の髪。夏はくくらないと暑いし、冬はマフラーを巻きにくい。家では「長いから落ちてるのを拾うのが大変」と文句を言われ、そろそろ切ろうかなと思っていたときに、ヘアドネーションを知った。自分の髪を寄付することで誰かを笑顔にできる、私の髪を使ってヘアアレンジを楽しんでほしいと強く思った。

そして髪を邪魔だと思えるほどに伸ばせることは、とてもありがたいことなんだと気付かされた。この記事は普段は気付かない大切なことを私に教えてくれた。

切った後はボブにするとして、今寄付できる長さは25センチ。目標まではあと6センチ。髪に幸せをたくさん詰め込んで、私もサンタになろうかな。

朝日新聞　2017年1月15日付朝刊を読んで

小野 雄希 さん
20歳　埼玉県

湯本さんの素朴で美しい行動を知って、僕は自分の生活を振り返らずにはいられなかった。

埼玉や東京では、僕が田舎出身だからか、本当に多くの人々が「目に入る」。でも誰一人として「会う」わけではない。そんな生活が長く続くと、僕が僕でなく、雑踏の一部になってきていると感じる。それは別に個性が無くなる、ということではないと思う。ただ自然と、感性的に、目立つことに怖くなってしまうのだと思う。だから落ちているごみや困っている人が目に入っても、拾ったり助けたりすると、自分の善意が目立ちそうでむしろ嫌だと考えてしまうのだろう。

でも湯本さんはそんなこと、少しも考えてなかった。ただ自分の中の善心に素直に従っただけなのだろう。だからこそ、彼女の行動は素朴で美しい。この記事を読んで、目立つうんぬんと考えていたことが恥ずかしくなり、また言いようのないうれしさに包まれた。ありがとう。

埼玉新聞　2017年1月6日付朝刊を読んで

散乱の古紙 一人で回収

鴻巣高の湯本さんに感謝状

一心不乱 ごみ袋3袋

鴻巣署は4日、県道に散乱していた古紙を一人で回収した行田市在住、県立鴻巣高校1年の湯本里咲さん(16)に感謝状を贈った。見て見ぬふりをして通り過ぎる自分を受け入れられず、後先のことを考えずに一心不乱に集めた行動は、周囲の心を揺り動かした。

（新井千昌）

古紙を一人で拾い集めた湯本さん。右は市村署長＝鴻巣署

自転車で通学している湯本さんは昨年12月21日夕方、鴻巣市屈巣の県道を通りがかった際、新聞紙や折り込みチラシが半径約3ﾒｰﾄﾙにかけて大量に散乱しているのを目の当たりにした。一度はそのまま通り過ぎたものの、「何もしていない自分に辛くなった」と戻って来た。

当初は古紙を自転車の前かごに積んで自宅に持ち帰ろうとしたが、収まり切れない。約500ﾒｰﾄﾙ離れたコンビニエンスストアへ行き、ごみ袋を買って戻り、再び拾い集めた。現場は交通量の激しい通り。湯本さんは青信号になるたびにひたすら拾い続けた。

午後5時20分ごろ、同署に「女子高生が落とした荷物を一人で拾っている。かわいそうだから助けてほしい」と連絡が入った。署員が駆け付けると、すでにごみ袋3袋分、計10ｷﾛの古紙が回収されていた。持ち帰り方法を考えていた矢先に署員が到着。安心した湯本さんの目からは涙が流れた。

高校ではバスケ部に所属している湯本さん。学校周辺のごみ拾いなど美化活動をしてから朝の練習に取り組んでおり、「学校でもやっているので当たり前と思って拾いました」と振り返った。

市村知孝署長から感謝状を贈られ、湯本さんは「周りの事をもっと見られる一年にしたいです」とほほ笑んだ。

大角 武 さん
21歳　東京都

「一瞬、懸命になればいい」。元プロボクサーの坂本博之さんの言葉だ。その言葉は私の心にストレートに響いた。

私は現在、都内の大学に通っている普通の学生だ。大学生として勉強する傍ら、学内にある英会話スペースでスタッフとして日本人に言語学習のサポートをしている。授業が終わるや否や、英会話スペースに赴き働くというのが私の日課だ。この記事を読むまで私は時間に忙殺されている気分だった。

勉強にしても、スタッフで働くにしても、いつも私は力が入っていた。何も楽しくなかったし、何も得られなかった。そんな学生生活を送っていた時、坂本さんのこの言葉が私にある種の“妥協のすべ”を提示してくれた。「一生じゃなくて一瞬でいいのだ」と。私はこれまですべてに対して全力を注いできた半面、勉学や英会話を心から楽しめなくなっていた。しかし、私がこの記事と出合ってから、その一瞬に力を注ぎその時々を楽しめばいいという気にさせてくれた。つっぱっていた肩が少しだけなで肩になったような気がした。

日本経済新聞　2016年12月31日付朝刊を読んで

発信進 2017 ▷2

不遇の子 笑顔に これが今の戦い

養護施設回る元ボクサー 坂本博之さん

ボクシンググローブをつけた子供たちが夢中で拳を繰り出す。北海道帯広市の児童養護施設「十勝学園」で3日、他の大人がミットを構えるなか、「さかもっちゃん」は素手でパンチを受け止めては「よし、もっとこい!!」と盛り上げていた。

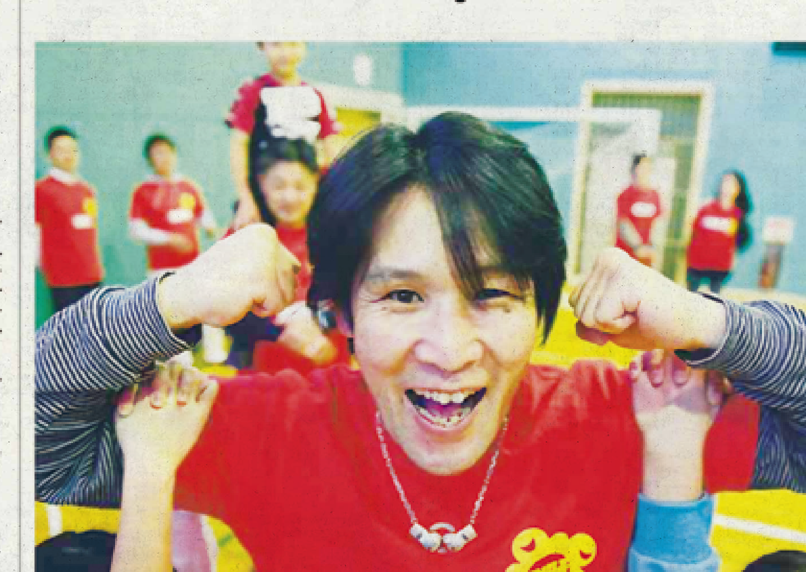
「平成のKOキング」の異名を持つ元ボクサー、坂本博之さん(46)。リングを降りて10年。東京都内でジムを運営しながら、毎週のように全国の施設を回る。親を亡くしたり虐待を受けたりした複雑な環境で育ち心を閉ざす子供に、かつての自分の姿を重ねる。

「誰も大人を信じられなかった。自分を守るため感情を押し殺し、常に無表情だった」

7歳だった1977年、1歳下の弟と福岡市東区の「和白青松園」に入った。1年半前、女手一つで育ててきた母と離れ、親戚に預けられた。だが大人から暴力を振るわれ食事も与えられない。学校の給食がない週末、飢えた幼い兄弟は川で捕まえたザリガニやタニシを口にした。何度か万引きにも手を染めた。

親類宅から移り、約8カ月を過ごした同園で夢を見つけた。テレビ中継されていたボクシングだ。「リング上なら自分を表現できる。俺にはこれしかない」と直感した。

「硬派」を気取って寡黙だったという中学時代、東京で一人暮らしするなど苦労は続いたが、ランニングや筋トレは欠かさなかった。高校卒業後にジムに入り、20歳でデビュー。2年後には日本王者になった。打たれても前に出る攻撃的なスタイルで破竹の19連勝を記録した。



ボクシングの楽しさや夢を持つことの大切さを伝える坂本さん（北海道帯広市）

和白青松園の子供と交流を始めたのはその頃だ。福岡に戻ると菓子を持って訪問。「お兄ちゃん」と慕う子供たちは試合会場まで応援にきた。

藤田芳枝施設長(65)は「身近に家族がいない子供にとって憧れの存在。励みになる」と語る。坂本さんにとっても支え合う“家族”ができたのは大きな変化だった。

世界王者には4度挑み、いずれも退けられた。特に2000年に畑山隆則氏と繰り広げた壮絶な打ち合いは、ボクシングファンの間では語り草だ。引退直後、全国の施設を回り始めた。

「陰を持っている自分だから伝えられることがある」

「つらい時こそ前に進む。その先には笑顔しかない」「夢のためにまず行動する。一瞬、懸命になればいい」。メッセージはきれい事にも聞こえ、空回りすることもあるだろう。だが心に傷を負った子供には、本気で向き合う坂本さんの訴えがストレートに響く。

昨年に十勝学園に入った川西楓さん（仮名、15）は母子家庭で親からは無視され、ふさぎ込みがちになっていた。「なんで私だけ、こんな目に」。悔しさをミットにぶつけると、すっきりした。「夢に向かって今から行動することの大切さを教わった」。女子中学生は今、教師になるという目標を生き生きと語る。

児童養護施設で暮らす子供は約2万8千人。児童相談所が対応した児童虐待は15年度、初めて10万件を超えた。

坂本さんは全国で講演し、大人にも「負の連鎖を止めよう」「子供の立場に目線を下げて」と呼び掛ける。施設での活動には毎回十数人の仲間が駆けつける。参加する仲間の輪は全国各地の約100人まで広がった。

「笑顔や成長を見た時が“勝利”。リングが変わっただけで、今も全力で戦っている。これが俺の生きざまだ」

（インタビューの一問一答を電子版に▼Web刊↓紙面連動）

HAPPY NEWS
大学生大賞
（グループ）

スポーツ法政新聞会の下田朝陽編集長（前列中央）と篠原直己・新聞PR部会長（同左から2人目）＝法政大で

スポーツ法政新聞会

HAPPY NEWS 2016の大学生大賞（グループ）は、多数の応募の中から審査した結果、スポーツ法政新聞会（東京都）が選ばれました。

贈賞式は3月1日、法政大の教室で行われ、学生や教職員ら約30人が出席しました。審査にあたった新聞協会の新聞メディアの強化に関する委員会・新聞PR部会の篠原直己部会長（日経）から、下田朝陽編集長に表彰状と目録が贈られました。

【スポーツ法政新聞会　下田朝陽編集長（20）のコメント】

学生新聞に関わる者として、栄誉ある賞をいただき大変光栄です。スポーツ法政は法政大学の体育会系の部活の活躍を取材していますが、スポーツだけでなく幅広い知識が必要だと感じ1年ほど前から新聞を読み込むようになりました。HAPPY NEWSキャンペーンに取り組み、新聞には事件・事故だけでなく、温かい気持ちになる記事がいくつも載っていると気付きました。スポーツ法政でも、読者に感動や幸せな気持ちを届けられる記事を書くことを目標にしたいと思います。

HAPPY NEWS 2016には大学生大賞（グループ）を受賞されたスポーツ法政新聞会のほか、以下の皆さんから多数のご応募をいただきました。ありがとうございました。

朝日塾中等教育学校/茨城キリスト教大学/大阪市立大学新聞Hijicho/鹿児島市立伊敷台中学校/鹿児島レディスカレッジ/金沢学院大学/川崎医療短期大学/川崎医療福祉大学/近畿大学総合社会学部総合社会学科/熊本電子ビジネス専門学校/専修学校熊本YMCA学院/慶應塾生新聞会/札幌創成高等学校/十文字学園女子大学/信州大学/成蹊大学新聞会/総合学園ヒューマンアカデミー大宮校/帝京スポーツ新聞部/帝京大学/東北学院大学/東洋英和女学院大学/東洋大学スポーツ新聞編集部/名古屋国際中学校/新潟県立新潟向陽高等学校/八戸市立是川中学校/花園大学/広島三育学院中学校/文教大学/北海道教育大学/松本大学/宮崎ビジネス公務員専門学校/明大スポーツ新聞部/立命館アジア太平洋大学/流通科学大学（50音順）

ゲスト審査員賞
(全4件)

小山薫堂賞

斉藤 ふみよさん
52歳 熊本県

4月7日は、娘の22回目の誕生日。毎年新聞を宝物箱に保管している。今年は、すぐに入れずに、何気なく袋に別にしていただけだった。14日夜、熊本地震が起こり、新聞は情報以外にも、私たちをガラスからも、ぬれた体や畳をも守ってくれた。今年の7日の新聞は、震災後のパニックで行方不明。ゆっくりと新聞を読んだのが30日。

その日久しぶりに「ぷっ」とニヤついた。重要な生活関連情報の中にその記事があった。ページ全体を、ぴりぴりした状況で読む読者に「笑う」ということを思い出させてくれた。読後、我が家ではどんなコメントにするか、おじいちゃんから孫、近所にまで話題が広まった。

各自頭をひねった。どうせなら、笑わせたい。その間は、震災の現実を忘れる時間をもてた。それは、皆の心にゆとりをくれた。引きつっていた顔が、少しだけ穏やかになった時間だった。記事の影響力と、これを書いた、岩崎記者の気持ちが読者に届いたこと。これほど新聞と読者がつながっていると実感したことはない。ひょっこり、7日の新聞が出てきて、このHAPPY NEWS募集を知った。新聞は保存すれば時空を超えると気付いた瞬間でもあった。

熊本日日新聞　2016年4月30日付朝刊を読んで

「笑って前向きに」

益城町で29日、倒壊した自宅を片付けていた山田キヌ子さん(69)の服には「更年期終り・さぬこ」の文字。夫や知人ら約30人でビニールハウス暮らしで、それぞれ「食いしん坊」「朝食担当」などと書いた服を着ているという。「みんなで笑いあえば前向きになれる」（岩崎健示）

わずか130文字の記事が、一人の読者に「笑い」というエネルギーを与え、それが連鎖していく様子に感動しました。新聞を読んで読者が書いた原稿はアナログですが、そこにはSNSを凌駕（りょうが）するような共感の力がみなぎっています。

小山薫堂(放送作家・脚本家)

森本千絵賞

樋口 秀一さん
48歳 神奈川県

年齢に応じた、年齢に見合う人生を過ごしてきました。何歳だから、との概念を超える記事に出合いました。大学を卒業する多くは20代だと想像していました。

あと数年で50になる年齢で、年金や老後の心配をしている自分が恥ずかしくなりました。世界最高齢・96歳で大学を卒業の記事に励まされました。健康な精神と体力が勝ったのでしょうか。私も春からいつかやりたかった小学校教員を目指して、大学の門をくぐる決意をしました。この記事のように年齢を言い訳にせず、やりたいときが青春期。背中を押していただいたことに感謝です。ありがとうございます。

読売新聞　2016年3月20日付朝刊を読んで

96歳 大学卒業

最高齢 ギネス申請へ

京都造形芸術大（京都市左京区）の通信教育部で陶芸を学んだ高松市の平田繁実さん(96)＝写真＝が11年間かけて学士（芸術）の学位を取得し、19日、卒業式に出席した。同大学によると、96歳と200日での大学卒業は、米国で記録された95歳を更新する世界最高齢とみられ、ギネス世界記録を申請する予定。平田さんは「楽しく勉強ができて幸せだった」と笑顔を見せた。

広島県北広島町出身で、海軍経理学校（東京都）を卒業後、同県呉市の海軍鎮守府の司令部で事務に従事。戦後は、広島県庁のほか、長崎県や香川県などの病院で事務職として働いた。

定年退職後、1989年から通う陶芸教室で「大学で本格的に学べば、もっと楽しくなる」と助言され、戦争で断念した進学を決意。2005年に同大学に入学し、自宅で作品を仕上げたり、リポートを作成したりして郵送で提出し、計131単位を取得した。手がけた作品は約3000点に上り、卒業制作では満喫した学生生活を花器で表現した。

卒業式では卒業証書が手渡されると、会場から大きな拍手が送られた。尾池和夫学長は「大学院に進んで世界記録を更新し続けて」と惜しんだが、平田さんは「まずは健康で100歳を迎えるため、長生きに専念したい」と話した。

京都造形芸術大

戦争で断念した進学を決意し、3000点の制作物、そして卒業制作を経て96歳で卒業した平田さんには感服します。当たり前のように大学にいき、感謝することも喜びをかみしめることもなく卒業していく人も多い中、きっと平田さんにとっては1日1日が大切で素晴らしい時間となって作品が生み出されていったと思います。

この記事に対して、感想を寄せた48歳の方が背中を押され小学校教員を目指して大学の門をくぐる決意をしたと書いています。まさにHAPPYの連鎖です。彼の言葉の「この記事のように年齢を言い訳にせず、やりたいときが青春期」がとても響きました。まさに平田さんは永遠に青春を生きています。私も年を気にせず、これからも初恋をしているような気持ちで作り続けなくてはならないなと気合いが入りました。

記事、そして感想、全てに感謝します。とてもHAPPYなエネルギーをいただきました。

森本千絵(アートディレクター)

男子も弁当の手作りに挑戦。「母親の大変さがよく分かった」という

芝生で手作り弁当を広げる熊本農高の生徒たち＝熊本市南区

おいしい楽しい 手作り弁当

熊本農高「くまべんの日」 生徒の自信作続々

高校生の昼ご飯と言えばお弁当。もちろん買うこともできるが、多くは家庭での手作りだろう。早起きして毎日お弁当を作る保護者の苦労は想像に難くない。たまには自分で弁当を作ってみよう、食べ物の大切さも分かるはず—。熊本市南区の熊本農高で21日、そんな恒例行事が開かれた。生徒が手作り弁当を持ち寄る「くまべんの日」だ。（松本敦）

生徒の労作いろいろ

写真は熊本農高提供

農業高校生として、食事への関心を高めるとともに、工夫を凝らした弁当をクラスの交流にもつなげようと、同校が毎年開いており9回目。全校生徒と教職員の約900人が参加した。

教室では、互いの弁当を見比べながら生徒たちが大盛り上がり。くまべんの日を生徒に呼び掛ける同校文化委員会の緒方愛美委員長（3年）は「命あるものをいただく食べ物や、農家の方への感謝の気持ちを新たにする熊農の名物行事だけど、女子のお弁当を男子が観察したり、意外に男子が料理上手だったりと、弁当を通して仲良くなれる楽しみもある」と言う。

みんなが作った弁当を、のぞいてみよう。

畜産科の松田蘭歩さん（1年）は、オムライスを丸めて揚げた「オムボール」をメインに、ネギの炒めもの、ハムのステーキ、ブロッコリー、卵焼きとバランスもばっちりの力作。これだけの弁当をわずか1時間で作り上げた。「両親ともに料理が好きで、自分も包丁を握ることに抵抗がない。冷凍食品を一つも使わなかった」と、"弁当男子"ぶりを発揮する。

芝生の上で友達10人と弁当を広げていた佐々木智華さん（生活科、3年）は「みんなに喜んでほしくて、いっぱい作ってきた」。豚肉、シメジ、キャベツ入りの具だくさん焼きそばをはじめ、いくつも弁当箱を並べて「食べて食べて！」。一緒にいた鳩野美月さん（同）の一品は手作り春巻き。「エビとアボガド」「カイワレ大根とめんたいこ」「キムチとささ身」など、具の種類も豊富で「みんなが楽しめるように、いろいろ作ってみた」。そのうちの1本を食べた友人は「わー、チョコが入っていた」と笑顔を見せた。

同校で育てているニワトリが生んだ卵を食材に選んだのは池本悠夏さん（畜産科、3年）。ゆで卵を鶏ガラスープの塩だれに1日漬け込んだ自信作の味付き卵で、「半熟具合もちょうどよくて、黄身も濃厚。味もまた格別だった」と満足そうだ。

食材や味にこだわったり、キャラ弁で楽しさを追求したりと、さまざまな弁当が登場したくまべんの日。生徒たちは「毎朝、弁当を作ってくれる母親の大変さがあらためて分かった」と、感謝の一言も忘れなかった。

miwa 賞

倉田 純花さん
19歳 熊本県

毎朝早く起きて、お弁当を作ってくれている両親。自分で作ると、その苦労がよくわかると思う。

高校生が自分たちで作ったお弁当。キャラ弁や食材にこだわったお弁当があり、見ていてこちらも楽しくなってきた。私は現在自分で作っていない。たまには自分で作ってみようと思わせてくれるような記事だった。将来子どもができた際に、たくさんキャラ弁を作ってあげたいと思った。食べ物の大切さ、親のありがたみ、料理の楽しさなどたくさんのことを学ぶことのできるこの行事はとてもいいと思う。他の学校にも広まっていくといいと思う。

熊本日日新聞　2016年9月30日付朝刊を読んで

高校生について書かれた記事を同年代の女の子が読んで、将来の子どもへの思いを抱いたり、両親に感謝したりしています。新聞を通じて親近感を感じたり、共感したり、また自分に置きかえて考えるというのがすてきだなと思いました。

miwa(シンガー・ソングライター)

野菜栽培 種貸します

吉賀のIターン男性「図種館」

津和野

「タネの図種館」に取り組む山口敦央さん

生育や採取「関心持って」

津和野町後田の徳種苗店で、野菜の種を「貸し出し」して栽培に取り組んでもらった後、種のみを返却してもらうサービス「タネの図種館」が行われている。種は、種類ごとに瓶に入れて店内に置いてあり、誰でも借りることができる。種を持参して各地に出向く「移動図種館」もあり、栽培の輪を広げている。（吉野仁士）

発案したのは、6年前に千葉県から移住し、吉賀町蔵木で在来種や固定種の有機野菜作り、種採りをしている山口敦央さん(35)。「昔からこの地にある種を後世に残したい」「植物の生育や種採りに関心を持ってほしい」という思いから、種採り農家が出入りしていたという同店の協力を得て貸し出し場所とし、8月にタネの図種館を始めた。9月から移動図種館にも取り組んでいる。

現在、取り扱っているのは、カブや小松菜、ブロッコリーなど、プランターでも栽培できる野菜約10種の種。借りる際は、日付や名前、種の量などを台帳に記入する。農家などから種の寄贈も受けており、今後、扱う種の種類を増やしていくという。

山口さんは、活動が広がれば、貸し出しを行う場所も増やしていく考えで、「種ができて命が巡ることや感動を体感できる機会とし、種採り人口の増加につなげたい」と意欲を見せている。

山本昌賞

岩田 芳美さん
59歳 島根県

「野菜栽培　種貸します」。この見出しを見て「へぇ～面白い!」と初めは思いました。

毎年、上手に野菜やお花の種を採って育てている近所の年配の方がいて、いつも感心しています。私も家庭菜園程度に畑をしていますが、野菜や花を育てるまではどうにかできても、種を採るとなると難しく、失敗ばかりしています。

野菜に関係あるこの記事を読むと、種採り、貸し出し、返却というサービスをして、栽培に取り組まれていると書かれてありました。

最近、人口減少に悩んでいる市町村が多く、私の町も全く同じで寂しくなります。新聞を見ても暗い内容が多く明るい話題がない中、Iターンの男性が考えた「タネの図種館」の記事は、自然も人も命がめぐって輪が広がる、そんなイメージで、私は「面白い」から「すごい」になり、とても幸せな気持ちになりました。記事が出てから日が過ぎましたが、読み直してみても、私の中では一番幸せな記事です。

山陰中央新報　2016年10月8日朝刊を読んで

私も常日頃、「今が一番若い。だから今から始めましょう!」と話しています。しかし、きっかけがなければ一歩がなかなか踏み出せません。コメント同様、事業に共感し、私も心がとても温まる思いがしました。

山本昌(スポーツコメンテーター)

第7回 いっしょに読もう！新聞コンクール HAPPY NEWS 賞

「いっしょに読もう！新聞コンクール」は、新聞協会が学校などで新聞を教材として活用する「NIE（Newspaper in Education＝「エヌ・アイ・イー」、教育に新聞を）」の一環として実施しています。2016年11月発表の第7回は、全国47都道府県と海外から過去最多の計4万5366編（小学生7590編、中学生2万64編、高校・高等専門学校生1万7712編）の応募がありました。

コンクールは、①新聞記事を選んだ理由や自分の意見・感想②家族や友だちに自分が選んだ記事を読んでもらい、その人の意見や記事について話し合った内容③話し合った後の自分の意見・感想・提言など――の3点を応募するものです。自分の感想・意見の表明だけではなく、周囲の人の意見も聞いて、児童・生徒により深く考える機会を提供することがねらいです。

同コンクールに設けたHAPPY NEWS賞の作品は次のとおりです。その他の詳細は、新聞協会NIEウェブサイト（http://nie.jp）をご覧ください。

HAPPY NEWS賞

南北の2人 にっこり自撮り

ネットで反響「だから私たちは五輪やる」

女子体操の韓国代表イ・ウンジュ（左）と北朝鮮ホン・ウンジョンの自撮り写真＝イ提供

リオデジャネイロ五輪に出場した韓国と北朝鮮の女子体操選手が、スマートフォンで仲良く「自撮り」している画像がネット上で話題を呼んでいる。分断され、緊張状態が続く両国だが、「五輪のあるべき姿」との声が広がっている。

韓国代表はイ・ウンジュ（17）、北朝鮮代表はホン・ウンジョン（27）。イは以前、「跳馬のうまい選手が北朝鮮にいる」と聞き、ホンのことを知った。北朝鮮の選手と交流したことはなかったが、4日にあった本番会場での練習で同じグループに。その後「記念に一緒に写真を撮ろう」と誘った。ホンとはそれ以上に会話を交わさなかったが、試合中はハイタッチをしたり声援を送ったり、お互いを励まし合ったという。

2人が自撮りする写真は海外メディアで報じられ、米国の著名な政治学者イアン・ブレマー氏がネットに載せて「だから私たちは五輪をやるんだ」とツイートすると、2万件以上リツイートされた。

イは「五輪は政治的なこととは関係ない。仲良くできたらそれでいい」と話している。

（リオデジャネイロ＝牛尾梓）

HAPPY NEWS賞を受賞した阿部瑞希さん（右）と記事を執筆した朝日新聞社の牛尾梓記者

阿部 瑞希さん
滋賀県・立命館守山中学校1年

読んだ記事：「南北の2人 にっこり自撮り」
朝日新聞 2016年8月11日付朝刊
意見を聞いた人：母

①この記事を選んだ理由と、記事を読んで思ったこと、考えたことを書いてください

私が、この記事を選んだ理由は、政治的なこととは関係なく、仲良く写っている二人が、すてきだからです。緊張状態が続く国と国の間だからといって、警戒して相手を避けたり、嫌ったりせず、自分たちの好きなことや、頑張っていることを通して、お互いの良さを知ることができるというのは、とても素晴らしいことだと思いました。だれとでも、分けへだてなく仲良くすることは、平和な世界にしていくために大切なんだと考えました。

②家族や友だちなどにも記事を読んでもらい、その人の意見を聞きとって書いてください

母は「国と国では、国境があるけれど、人と人との間には、国境なんて無いんだね。こういった並んで写真を撮るという普通のことが、新聞に取り上げられない世の中が来れば、それを平和な世の中というのかもしれないね」と言っていました。

③話し合った後のあなたの意見や提案・提言を書いてください

女の子同士で、仲良く写真を撮るという普通の行動が、新聞に取り上げられるのは、本当は、おかしいことなんだと思います。平和な世の中をつくっていくためには、国の政治や国の問題、国の見ためだけで人を判断するのではなく、人の良い所をどんどん見つけ、国のこととは関係なく仲良くしていくことが大切です。そんな人が増えていけば、国同士の関係も、良くなっていくと思います。人と人との心の間には、壁なんてありません。一人一人に、仲良くなりたいという気持ちさえあれば、世界中の人と、仲良くなれるはずです。私は、よく、国同士の政治的な問題について見聞きしますが、その国の文化や人々のことについて見聞きすることは少ないと思います。私たちは、平和な世の中をつくっていくために、いろいろな国の文化や人々のことを学んでいくことが、私は重要だと思います。

【授賞概要】

リオ五輪の期間中、韓国と北朝鮮の女子体操選手がスマートフォンで「自撮り」した画像がネット上で話題になりました。阿部さんは、仲良く写っている二人がすてきだと感じたこの新聞記事を選びました。

お母さんは阿部さんに「並んで写真を撮るという普通のことが、新聞に取り上げられない世の中が平和な世の中なのかもしれない」と話します。平和な世の中を築くにはどうすべきかを考えた阿部さんは、国同士の問題にとらわれず、人同士が仲良くするためにさまざまな国の文化や人について学ぶことが重要だと結論づけました。記事を選んだ視点や、他者を理解することの普遍的な価値にまで考えを広げた点が評価され、HAPPY NEWS賞に選ばれました。

※学校名・学年、肩書等は受賞当時（2016年11月）

日本の新聞・通信社　日本新聞協会加盟の新聞・通信社です。当協会ウェブサイト（http://www.pressnet.or.jp/）から各社のサイトにアクセスできます。
● 東京地方 / 朝日新聞東京本社 / 毎日新聞東京本社 / 読売新聞東京本社 / 日本経済新聞社 / 東京新聞 / 産経新聞東京本社 / サンケイスポーツ / 夕刊フジ / ジャパンタイムズ / 報知新聞社 日刊工業新聞社 / 日刊スポーツ新聞社 / 日本工業新聞社 / スポーツニッポン新聞社 / 東京スポーツ新聞社 / 電波新聞社 / 日本海事新聞社 / 水産経済新聞社 / 東京ニュース通信社 / 日本農業新聞 共同通信社 / 時事通信社 / エヌピー通信社 ● 大阪地方 / 朝日新聞大阪本社 / 毎日新聞大阪本社 / 読売新聞大阪本社 / 日本経済新聞大阪本社 / 産経新聞大阪本社 / 日刊スポーツ新聞西日本 ● 北海道地方 / 北海道新聞社 / 室蘭民報社 / 十勝毎日新聞社 / 釧路新聞社 / 苫小牧民報社 / 函館新聞社 / 北海道日刊スポーツ新聞社 / 道新スポーツ ● 東北地方 / 東奥日報社 / 陸奥新報社 デーリー東北新聞社 / 岩手日報社 / 岩手日日新聞社 / 河北新報社 / 秋田魁新報社 / 北羽新報社 / 山形新聞社 / 荘内日報社 / 米澤新聞社 / 福島民報社 / 福島民友新聞社 / いわき民報社 ● 関東地方 / 茨城新聞社 / 下野新聞社 / 上毛新聞社 / 桐生タイムス社 / 埼玉新聞社 / 神奈川新聞社 / 千葉日報社 ● 中部地方 / 山梨日日新聞社 / 静岡新聞社 / 信濃毎日新聞社 / 長野日報社 南信州新聞社 / 市民タイムス / 中日新聞社 / 中部経済新聞社 / 東愛知新聞社 /岐阜新聞社 ● 北陸地方 / 新潟日報社 / 北日本新聞社 / 北國新聞社 / 中日新聞北陸本社 / 福井新聞社 / 日刊県民福井 ● 近畿地方 / 伊勢新聞社/夕刊三重新聞社 / 京都新聞社 / 神戸新聞社 / 奈良新聞社 / 紀伊民報社 / 熊野新聞社 ● 中国地方 / 山陽新聞社 / 中国新聞社 / 新日本海新聞社 / 山陰中央新報社 / 島根日新聞社 山口新聞社 / 宇部日報社 ● 四国地方 / 徳島新聞社 / 四国新聞社 / 愛媛新聞社 / 高知新聞社 ● 九州地方 / 西日本新聞社 / 朝日新聞西部本社 / 毎日新聞西部本社 / 読売新聞西部本社 佐賀新聞社 / 長崎新聞社 / 熊本日新聞社 / 大分合同新聞社 / 宮崎日日新聞社 /夕刊デイリー新聞社 / 南日本新聞社 / 南海日日新聞社 /沖縄タイムス社 / 琉球新報社 /八重山毎日新聞 / 宮古毎日新聞社

発行 一般社団法人 日本新聞協会
〒100-8543
東京都千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル7階
電話 ： 03-3591-4637
http://www.yondoku.com